

## 二国間交流事業 セミナー報告書

令和5年4月30日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]  
関西学院大学・ハンズオン・ラーニングセンター  
[職・氏名]  
教授・木本 浩一  
[課題番号]  
JPJSBP 220217901

1. 事業名 相手国: インド (振興会対応機関: ICSSR) とのセミナー

2. セミナー名

(和文) インドにおける地域研究の伝統と継承

(英文) Tradition and Succession of Regional Geography in India

3. 開催期間 2023年3月11日～2023年3月17日 ( 7 日間)

【延長前】 2021年10月1日～2021年10月7日 ( 7 日間)

4. 開催地(都市名)

西宮、大分、広島

5. 相手国側代表者(所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

Manish Kumar, Assistant Professor, Central University of Haryana

6. 委託費総額(返還額を除く) 1,140,000 円

7. セミナー参加者数(代表者を含む)

	参加者数	うち、本委託費で渡航費または日本滞在費を負担した場合*
日本側参加者等	5名	1名
相手国側参加者等	6名	6名

参加者リスト(様式B2)の合計人数を記入してください。該当がない箇所は「0」または「-」を記入してください。

\* 日本開催の場合は相手国側参加者等の日本での滞在費等を負担した場合、相手国開催の場合は日本側参加者等の渡航費を委託費で負担した場合に記入してください。

## 8. セミナーの概要・成果等

- (1) セミナー概要(セミナーの目的・実施状況。第三国からの参加者(基調・招待講演者等)が含まれる場合はその役割とセミナーへの効果を記載してください。関連行事(レセプション、見学(エクスカーション)その他会合(別経費の場合はその旨を明記。))などがあれば、それも記載してください。各費目における増減が委託費総額の50%に相当する額を超える変更があった場合には、その変更理由と費目の内訳を変更しても計画の遂行に支障がないと考えた理由を記載してください。)

本セミナーは、広島大学を中心に1960年代から継続的に実施されてきた地誌学的学術研究に関わることによって研究者となった日本・インド両国の研究者が集い、その歴史を振り返り、これからの地誌学的学術研究の方向性と可能性について検討した。コロナ禍のためセミナーを延期し、インド側メンバーが参加しやすいスケジュールとしたため、当初予定していた日本側のメンバーが海外調査や校務のため参加できなくなった。その代わりに、事前にインド側メンバーに対して上記目的に関わるテーマの提出を求めた。その結果、観光と開発をテーマとした巡検(エクスカーション)を実施した(太宰府、柳川、阿蘇、久住連山)。セミナーそのものは、大分大学、関西学院大学において二回実施し、本セミナーの趣旨の共有・確認、各自の報告を行った。大分では、小山准教授に参加してもらい、大分市のコンビナート建設や住宅開発の歴史について意見交換を行った。

- (2) 学術的価値(セミナーにより得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

本セミナーは、単なる技術や手法になりがちな「科学」に対して、思考の枠組みやテーマ設定そのものを問うといった学術的意義を見だし、それらを具体的な調査や個別化した研究領域へとフィードバックすることによって、学術とは何かを問う科学を再構築することを目指した。そのため、セミナーでは個々人の報告だけではなく、全体テーマとの関連において他者の報告に対するコメントを求めた。こうしたディスカッションは、今後の共同研究や出版計画に具体的な成果を残すこととなった。

- (3) 相手国との交流(両国の研究者が協力してセミナーを開催することによって得られた成果)

インド側セミナーの参加者は、共同代表を予定していた故・R.B.シン教授の後輩や弟子である。彼らとはこれまで学会や調査の際に顔を合わせる程度の関係であったが、セミナーを通して、個々人の研究に対する姿勢や研究内容を知ることができた(世代間交流)。

- (4) 社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

上述の通り、本セミナーは何らかの成果を社会に対して提出するという考え方ではなく、研究や科学、調査の、単なる学術的意義でなく、社会的意義(≠貢献)を問うというスタイルで実施した。日頃別々の領域や組織の中で研究や教育に関わるメンバーが一堂に会し、自らの営みを再興することは何よりの社会的貢献であると考えた。

(5) 若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取組、成果)

メンバーがそれぞれの所属で若手研究者を育成しており、セミナーの後半では、今回の成果をいかに若手研究者育成のための教育プログラムの中に活かしていくのかという議論をした。実際、代表者はインドでの打ち合わせの際(2023年1月)、数校を訪問し、本セミナーを実施することと、セミナーで目指そうとしていることについて、若手研究者(主として大学院生)に対して説明を行った。

(6) 将来発展可能性(本事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

今回のメンバーをコアメンバーとして、国際共同研究の実施に向けた準備を進めている。この研究はいかにして共同研究は可能か、その枠組みとして地誌学の可能性を追究するという内容にする予定である。

(7) その他(上記(2)~(6)以外に得られた成果(論文発表等含む)があれば記載してください)

本セミナーの成果は、セミナーに参加できなかったメンバーを含め、今年度中に書籍として出版する予定であり、その準備を始めている。